

「JAPON, SO TOYODA」

アナンスがあった瞬間、会場にいた500人が一斉に歓声をあげた。

僕は今スポールブール日本代表としてフランスで行われている世界選手権に出場している。

僕は今感動につつまれているのだ。

僕は今ついに自分の居場所を見つけた。

夢である人々に感動を与える人間になるためにこの居場所にいるのだ。



Mondial Sport Boules Nice 2003



< 努力する事 >

僕は昭和54年4月2日に埼玉県で生まれた。

小さい頃僕はいじめられっ子だった。原因は普通の子と幼稚園が違った事と、同じマンションにいじめっ子のボスが住んでいた事だった。

しかし、小学校2年生の時校内すもう大会に優勝して環境が変わった。いじめっ子のボスに認められ親友となったのだ。いじめっ子のボスの名前は曜君だった。

僕は曜君と同じ小学校野球チームに入り、仲はますます深まっていった。

小学生の時僕は特にスポーツ、勉強ができるわけでもなく普通の子だった。

でもある事件をきっかけに僕は変わった。

小学校5年生の時から曜君と僕は毎日夜20時にマラソンをする約束をしていた。

曜君が毎日僕の家に来るのを呼ぶにきて、それから出発していた。

3ヶ月ぐらいたった頃から僕はマラソンをしたくなくなってきた。毎日曜君が来るのが苦痛になってきたのだ。今日もくるのか・・・こなきゃゆっくり寝られるのに。と毎日思うようになってきた。ある日僕の家族で夜外食する事になった。外食に行くならしょうがない今日は中止だな。曜君もあきらめて家に帰るだろう。僕は曜君にはなにも伝えないで家族と家を出た。外食を終えて車で家に帰る途中僕は目を疑った。

なんと曜君が一人で走っていたのだ。しかも通常のマラソンコースよりかなり距離が長い所を・・・。

僕は感動を覚えた。

感動は尊敬の気持ちを抱いた瞬間に生まれる。

曜君は別に僕のためにマラソンをしているのではない。自分のために努力しているのだ。

そして次の日、曜君は昨日の事は何も触れずにいつものように夜20時に僕を迎えにきた。

この事件以来、僕は努力するって事がカッコいいと思うようになった。

小学校の時の一番好きな言葉は「努力あるのみ。」

曜君と僕は小学校6年まで毎日夜マラソンをして努力をした。

その結果小学生6年生の時僕は学校代表で駅伝大会や市内陸上大会に出場するようになり、校内マラソンでも3位というスポーツマンとなっていった。

中学校時代には区間新記録や、市民マラソン2位になるなど走るのが大得意となった。

努力は必ず報われる。僕は曜君から努力する素晴らしさを学んだ。

<小さい頃の夢>

僕は中学校から茨城県に引っ越した。

中学1年生の夏、僕と同じマンションに住んでいた仲のいい同級生の兄貴がテレビにでていた。夏の高校野球埼玉大会決勝が放映されていたのだ。この兄貴は毎夜一日も欠かさず素振りをしていた。僕は努力を真近かで見してきた。

その兄貴がテレビにでていて、そして解説者にキーマンとして紹介されていた。

僕は心が躍った。すごく興奮したのを覚えている。

「すげえ、すげえ。俺もこうなりたい。」

僕は感動を覚えた。

感動は憧れの気持ちを抱いた瞬間に生まれる。

結局試合には負けてしまって甲子園には出場できなかった。

しかし僕には夢ができた。

茨城県の大会を勝ち進んで大きな大会で曜君と甲子園で対戦する事が僕の夢になった。

これが実現できれば僕は感動を受ける事ができる。そう確信した。

曜君は地元でもかなり有名な野球選手だったので後は僕の努力だけだった。

自分の成長した姿を見せたい。自分のために僕は人一倍に練習した。

中学校入学時に身長が170cmあった僕は学校でも目立つ存在だった。

その巨体は監督の目にも留まり僕は1年生からただ一人レギュラーとなった。

高校2年生の時には北関東大会で現在NYヤンキースの投手である井川投手とも対戦した。

そして、キャプテンとして出場した最後の大会、同点で迎えた延長戦で僕のチームは僕のエラーで一点を取られてしまった。エラー後の最後の攻撃で監督が僕に言った。

このチームは最初お前のチームでスタートした。でも今はお前だけのチームじゃない。みんなのためにホームランを打ってこい。』 結果は大きなレフトフライだった。試合が終わった後、自然と涙がこぼれてきた。本当に毎日苦しい練習だった。それがこんなにもあっさり負けると思わなかった。

でも、俺の夢はまだ終わっちゃいない。夢への情熱は膨らむばかりだった。

< 不完全熱焼 >

高校は甲子園を狙える高校へ。それが僕の夢の第一歩だった。

中学校2年の冬に隣町の高校が関東大会に出場していた。そして3年の夏、彼らは前評判を覆し甲子園へ出場した。二試合連続ミラクル大逆転勝ちだった。一回に6点入れられながら最終的には逆転した試合や、8回に6点とられたが7点ひっくり返した試合もあった。同点だった9回に1点取られその裏に2点を入れてサヨナラ勝ち。すべて劇的な試合だった。

僕は感動を覚えた。

感動は不可能を可能にした瞬間に生まれる。

そして高校の近くにある中学も全国大会に出場していた。甲子園への条件はそろったと確信した。そして入学を決めた。

しかし、高校に入学すると厳しい現実が待ち構えていた。

この高校の野球部は県内でも有名な上下関係が厳しい学校と言われていた。

先輩を見たら駅でも電車でもトイレでも90°で大きな声で挨拶しなければならない。

朝は朝練の30分前からグラウンド整備、昼休みもグラウンド整備、夜も練習後のグラウンド整備。先輩が全員帰るまで帰れない。グラウンドは常に全力ダッシュ。

先輩が引退するまで先輩にはいびられた。しかしそれが礼儀を覚えるきっかけになり、そしてなにより精神的に強くなった。

高校1年生の冬、衝撃的な事件が起きた。なんと曜君が高校を中退したのである。

それどころか高校では野球部にすら入部していなかった。僕の小さな頃からの夢はあっけなく消えさった。なにもかも信じられなかった。

夢を失った僕は自然と野球に力が入らなくなっていった。そして時は経ち、先輩達が引退して僕らの新チームが結成された。高校2年生の夏だった。誰がレギュラーになるのか？誰がどこを守り、誰が何番なのか？

僕は期待に溢れていた。しかし、僕の名前はスタメンからなかった。

今までの野球人生は常に中心メンバーだった。試合にでない日はなかった。

いつも頼りにされていた。そしてそれに答えてきた。真剣に考えた。僕は何なんのだ？

このチームに必要なのか？最初の試合の結果は惨敗だった。しかも相手は県内一の進学高だった。勉強でも野球でも負けた。

強いチームの控えならまだしも明らかにチーム力は弱かった。

そして控え選手が出場する二試合目のメンバーが発表された。次々と後輩の名前が呼ばれていった。自分がキャッチボールやトスバッティングを頼んでいる後輩が4番に座った。

9番ライト 豊田。最後にこう呼ばれた。

力が抜けた。でも不思議と悔しさはなかった。

今までみたいにこの冬は人の倍練習していた訳じゃなかった。体がこの結果を受け入れていた。努力しなければ悔しさが生まれえない。僕は努力の大切さを忘れていたのだった。

今まで後輩に対していろいろ指導して偉そうな事を言ってきた。

でも、自分自身で野球才能がない事はわかっていた。それがただ結果として現実となっただけだ。

僕は試合中守っている時にこの試合を最後にしようと決めた。

最後の試合、命一杯楽しんだ。最後だとわかると何があっても笑顔でプレーできた。最後の打席渾身の一振りでもバットを振った。結果はショートゴロだったが一塁を駆け抜けた瞬間、僕にはやり遂げたという満面の笑みが浮かび出てきた。

甲子園で曜君と戦いたい。その一身で生きてきた。その情熱が生きていく生きがいであり、楽しみだった。その瞬間を想像するだけ体中からエネルギーを感じた。どんなに苦しい事も耐えられた。もし、最後まで野球部を続けたら完全燃焼していたかもしれない。そのエネルギーが燃えついたかもしれない。大人になってスポーツをしたいとも思わなかったかもしれない。

僕の居場所は無となった。

僕の夢は完全に無となった。

自分の夢に対する不完全燃焼。これが将来新たな夢を探す根底にあった。

そして、僕の夢と居場所を探す新たな旅が始まった。

<与えられる人から与える人へ>

高校を卒業すると僕は都内に引越しサラリーマンになった。

そして、小さな頃からずっとスポーツをしていたため週末になると

大学のテニスサークルや社内の野球チーム、サッカーチーム、そしてスポーツジムなど四六時中運動をしていた。しかし、スポーツをして運動する事態が目的となっている自分に気が付かないでいた。たしかにその場その場の感動や、健康維持などは得られる。

でも、僕の居場所となるには不十分だった。

その居場所には夢がないからだ。

しかし、転機は突然訪れた。

僕が21歳の時だった。仕事もプライベートも充実していた僕は毎日を本当に楽しく生きていた。そんな時僕は静岡で偶然太平洋を見た。見た瞬間衝撃が走った。あまりにも太平洋は大きすぎた。あまりにも自分は世の中を知らなすぎる事に気付いた。自分の小ささを思い知ったとともに成長したいと想った。自分の無知を自覚したのだ。

この気付きは大きかった。

僕は感動を覚えた。

感動は自分にはできないと感じた瞬間に生まれる。

今はできないかもしれないけど、10年後にこの海をもう一度見た時に絶対小さいと思えるようになりたいと自分に誓った。

僕は海に感動を与えられた。でも僕は誰にも感動を与えられない。

海を小さいと思えるには自分が感動を与える人間になる事が必要だと想った。

この日以来、人々に感動を与える人間になる事を決意した。

そしてこれが僕の夢になった。

では、感動を与える手段は何か？

僕の居場所はどこなのか？

夢は決まったけど居場所はわからなかった。

居場所が決まるまで僕は自分自身という種を成長させ続ける事にした。

僕の居場所を探す旅が始まった。いくら成長しても種は種だ。けして実はなる事はない。

けして夢は叶えられない。居場所を決断して種を埋めるまでは・・・。

<スポールブールとの出会い>

僕とスポールブールとの出会いはテレビだった。

僕が21歳3月3日の日曜日、この日僕は友達の結婚式のため地元の茨城に行っていた。

東京に帰ってきたのは夜だった。僕は何気なくテレビをつけた。

すると・・・、こんな企画番組が放映されていた。

「あなたがオリンピック選手になる方法」

四年に一度、世界中のスポーツ選手たちが頂点を目指す、オリンピック。

普段、特に何のトレーニングもしていない我々一般人が、このオリンピックに出場できる可能性はないのだろうか？

通常、オリンピック出場資格を得るためには、

オリンピック標準記録をクリアしていること、 様々な選抜大会を勝ち抜くこと、
が条件になるが、これらをクリアするのはそう簡単ではない。ところが過去に、ごく普通のサラリーマンがオリンピックに出場した例があった。

大手ビール会社の営業マンであった大島宏之さん（当時26歳）は、仕事の途中で、ボブスレーのオリンピック強化選手の一般公募記事を偶然、目にした。ボブスレーの経験はなかった大島さんだったが、学生時代、陸上部に所属し、運動をしていたこと、社会人になって日々の生活に何となく不完全燃焼を感じていたことから、強化選手の一般公募のテストを受けることにした。まさか合格するとは思っていなかったが、結果は、合格。

それから2年後、大島さんは、1994年の「リレハンメル冬季オリンピック」に、ボブスレー日本代表として出場したのである。わずか2年でオリンピックに出場した大島さん。～我々一般人がオリンピックに出場する方法 2 オリンピック正式種目目前のスポーツの選手になる～

白髭氏によれば、日本ではいわゆる『マイナースポーツ』と呼ばれている競技の中に、正式種目となる条件をクリアしそうなものがあり、いち早くそうしたスポーツを始めれば、正式種目になったところで、オリンピック代表選手になれる可能性が高いという。そうした正式種目目前とされるスポーツの中でしか、初心者でも始め易いものとしては、「綱引き」_、「カヌーボロ」_、「スポールブール」_、「クロッカー」があるという。

スポールブール（競技人口：300人・必要経費：平均約4万8千円）

「スポールブル」とは、全長 27.5m、幅 3~4 m のコート内を、5 分間走り続け、最大およそ 20 m 先に置かれた標的球に何回自分のボールを当てられるかを競う競技。ヨーロッパではローマ時代から盛んに行われている歴史あるスポーツで、「日本スポールブル連盟」によると、重要なのは、まず遠くにある標的に当てることのできるコントロール能力で、適性の目安は、8メートルはなれたゴミ箱に、小さい物を高確率で投げ入れることができるかどうかだという。さらに、スポールブルでトップクラスの選手になるための目安としては、1リットルのペットボトルを持ちながら全速力で、例えば公園のグラウンドなどを5分間走り続けられることだという。

スポールブルの原型は紀元前 10 世紀ごろと推定されています。そこで、人類の最も古いボールゲームであろうと言われるわけです。

古代ギリシャではスフファエラ（球形の意味）と呼ばれる球技が行われていたことが文献



で明らかになっています。

古代ローマでもカラカラ寺院等には、今のブル競技と同じようにボールを投げている人や、ポイントを測定している人のフレスコ画が残っています。

こうしてブルは何世紀にもわたってヨーロッパ

の人々の間でラプレーやディドロ、スペインの画家ゴヤなど後世に名を残した天才たちもブルをこよなく愛したことは有名な語り草になっています。

それはまさに運命の出会いだった。

野球で鍛えたボールを投げるコントロールと肩の強さ。

陸上で鍛えた持久力。まさに僕にピッタリの競技だった。

でもテレビ番組を見てここまでやる気を起こせたのか？

それは種と居場所と夢がピッタリ一致したからである。

自分という種を埋める場所

「努力すればオリンピックに行けるよ。」一緒に練習していた選手から言われた。

練習は東京都内の青山公園で毎週木曜日と土曜日に開催されている。

僕は土曜日に練習に参加した。丁寧に説明してくれる望月さんは前回の世界選手権に出場している。スポールブールの歴史や世界選手権の話などを聞かせてもらい興奮した。

そして、翌日も急遽、伊久美さんが教えてくれる事になった。伊久美さんはモロッコで成年海外協力隊として働いていたときにスポールブールに出会ったという。そして日本帰国後、スポールブールの魅力を日本に広めようと普及活動をしている第一人者である。自身も選手として世界選手権に出場している。

一週間後には僕は4万円以上する用具を買って自分自身の逃げ道を断った。

練習を始めて3ヶ月後、この頃の僕は社会人と大学生として忙しい日々を過ごしていた。

とにかく時間がない。それでもなんとか週一回は練習に参加していた。

ある日練習試合をしているとある事に気付いた。負けてもくやしいという感情が湧いてこなかったのだ。それどころかこの忙しい中よく練習に来ていと練習する事に満足してしまっていたのだ。練習のための練習ではない。勝つための練習なのだ。

なぜ僕は悔しくないのか？答えは明確だった。努力してないから、負けるのが当たり前だと想っているから悔しくないのだ。もっと時間を費やせ、もっと苦しめ、悩め。

そして自分の居場所を決断するのだ。

僕は4年半勤めていた会社を退社した。

そして毎日朝の投げ込みと夜の走りこみを始めた。

練習するしかない。1年後に控えた世界選手権出場のためにはまず日本選手権で優勝しなければならぬ。まずは自分のフォームを完璧にして感触をつかまなければ。僕はスポールブール兼体力トレーニング合宿を茨城で一週間した。

筋肉痛になりながらもボールを投げ続ける。雨が降っても走り続ける。

僕は自分自身という種を埋める居場所をスポールブールに決断した。

種の成長から実を咲かせる事への成長へ。

この変化は大きな違いだった。実を咲かせたいなら自分の種の居場所を決断しなければならない。そして種を鍛えるのではなく実を咲かせる事を鍛えないといけない。

< 全日本選手権 >

僕が23歳の5月5日に10月にフランスで行われる世界選手権で最も重要な選考会、全日本選手権が開催された。自然と緊張が走る。もし勝てなかったら今までの練習は意味がないといってもいいすぎではない。絶対勝つしかないという気持ちだった。

でも今までの大会で僕は優勝した事するなかったのだ。

予選で10球の記録を出し僕は決勝に駒をすすめた。自己新記録だった。

「伊久美さん、うれしいだろ。」と同じく決勝に進んだ岡元さんが伊久美さんに声をかけた。軽く頷いた後、僕に「ここは勝ちたいね。」と声をかけた。

決勝進出は僕だけが嬉しいのじゃなかった。僕を育ててくれた伊久美さんもうれしかったのだ。

2人で行われた決勝戦、先行は僕だった。この時の僕は集中していた。そして的がすごく近くに見えていた。自分が投げたボールが止まって見えた。投げている自分が気持ちよかった。人は集中力が頂点を越えると脳が圧縮し時間がたつのが遅く感じ、ボールが止まって見える、卓球で全日本選手権を優勝しアジア王者になった人から聞いた事がある。

僕はZONEに入ったのだ。18球は当時の公式日本新記録だった。

最後の一球を投げた時僕はガッツポーズをした。

しかし、その姿に望月さんが激怒した。「そんな暇があったら後、もう一球投げられるだろ。」慌ててもう一球投げようとしたが1秒足りなく投げたボール無効となった。

最後の最後で集中力が切れてしまったのだ。

「この記録の後じゃやりにくいなあー。」と笑顔で笑う岡元さん。

そして後者の岡元さんの集中力もすごかった。ボールを投げては的にどんどん当てていく。彼はこの競技ではほとんど負けた事がない前回の全日本チャンピオンだ。

一球当たるたびに僕の記録に近づいていく。

外れるとかなりの安堵が僕を襲う。いつもは的の近くで外れると惜しいと口に出すのだがこの日は外れるのを祈るばかりだった。

そして5分がすぎゲームが終了した。記録は16球だった。

「おしかったなあー。もう少しだったのに。おめでとう。」とやり遂げた表情で岡元さんは僕に言った。

この時僕は岡元さんの大きな心に大人を感じた。

僕だったら相手の事を褒める事はできなかつたらう。

まだまだ小さい人間だった。

それと同時に僕は一球の重さを感じた。最後きちんと投げていればもっと楽になれたのに。

この時から最後までやり遂げる事が体に染み付いた。

さてはとにかく僕は全日本チャンピオンになり、世界選手権の切符を手に入れたのだった。

< 日本代表の責任 >

世界選手権の日は刻々と近づいてきた。それと同時に緊張と回りの期待も高まってくる。

「世界選手権頑張れ」と多くの人に励まされた。もう自分一人のためじゃない。

自分の全力をつくす責任があると決心した。

『日の丸を背負う意味は分かるか?』と望月さんに質問された後から日本代表としてのプレッシャーを感じるようになった。僕なりの答えは日の丸を背負うという事は日本の歴史や文化を背負うという意味だった。

日本という国が存在できているのは多くの人々が血を流して築き上げ守りぬいたからである。その日本の代表として恥ずかしいプレーはできない。

プレッシャーの影響から深夜ランニングをしている途中で毎回背中に痛みが走るようになった。そして走る事さえ難しくなってしまった。そんな中僕の支えとなったのは世界中のプレイヤーの中で自分の力がどれほど通用するのか?という純粋な好奇心だった。あくまでチャレンジャーという気持ちで自分にやれる事をやろうと気持ちを整えた。

練習では15以上の記録を連発し調子も上がってきた。

そして成田空港へ。

日本でやれる事はすべてやった。 2003年10月3日、僕は決戦のフランスへと飛びたった。

< 世界選手権 >

世界選手権はフランスのニースで行われる。

ニースはフランスの南東の地中海沿岸、モナコ (Monaco) (F1 グランプリで有名) とカンヌ (Cannes) (国際映画祭の開催地) の間に位置している。パリから 931km (580 マイル) のところに位置し、イタリアとの国境までは 30km (18 マイル) しかない。街は、アルプス山脈 (the Alps) とペイヨン川 (Paillon River) が海にぶつかる地点のアンジュ湾 (天使の湾 <Baie des Anges>) に沿って広がっている。街の北側は木々の茂った丘やエステレル山地 (the Esterel) とメルカントール (Mercantour) の山々に囲まれている。

港とル・シャトー (Le Chateau) という名で知られる丘の上にある旧市街は街の南東地区にある。ここは、観光にも、レストランやナイトスポットを探すにも適した場所だ。街の北東はシミア (Cimiez) と呼ばれる裕福な居住地で、いくつかの優れた美術館や博物館がある。近代的なエリアは街の中心広場であるマセナ広場 (Place Massena) の北と西、有名なプロムナード・デザングレ (Promenade des Anglais) の後方に広がっている。このプロムナードは、弓形の海岸線に沿って港から西方に延びている。

空港に着くと現地スタッフが JAPON と書かれた看板を持ち向かえに来ていた。そして日本チームが宿泊するホテルに案内してもらった。ホテル代や食費はすべて主催者持ちだった。ニースの街中にならぶ世界選手権の広告、町中にあるスポールプール競技場、まさにフランスにとっては国技だ。今回のために建設したスポールプール用のドーム休場には世界各国の旗が吊るしてあった。そして大人数が座れる観客席。僕は5日後にはここでプレーするのだ。すでにオーストラリアやチリ、ペルーなどのチームは練習を開始していた。初めて見る海外選手の練習姿。同じスポーツをしているものが世界中にいる事、そして今から対戦する事に共感を覚え僕は感動を覚えた。

感動は共感した瞬間に生まれる。今回の参加チームは30ヶ国以上。



スポールボールの発祥の地はフランスであり、クロアチア、スロベキア、イタリア、スペインにも人気がある。

フランスの旧植民地であるモロッコ、ギニア、アルジェリアも盛んだ。

16世紀のスペイン王国南米大陸植民地化と同時にチリ、ペルーへと伝わっていった。

オーストラリアには19世紀、アメリカには20世紀に広がっていった。

日本に伝わったのは1985年。

ボール一つで世界中から30カ国以上の人が集まり真剣に戦う。そしてその中に自分がいる。

ペルー代表はすごく陽気なチームだ。初めて会ったのは大会前に行われたスモールパーティーで日本代表の向かい側に座っていた。3人の選手と2人の監督、コーチ。

「HOW OLD ARE YOU?」と僕はペルー代表に尋ねた。

しかし彼らは答えられない。誰一人英語を喋れないのだ。

それどころかスペイン語でめちゃめちゃ陽気話し掛けてくる。

10分以上の会話の結果どうやら娘が日本で働いている事だけは確認できた。

「gokuu, gokuu.」と何やら聞いた事のある単語をリピートしている。

日本の大人気アニメドラゴンボールのキャラクターだ。

僕がゴクウの髪型を真似て格闘シーンを真似ると彼らは大笑い。

言葉は通じないけど気が合う僕らはスペイン語を習ったり、一緒にご飯を食べたり、様々な思い出を作っていた。僕のちょっとしたしぐさでも反応し大笑いする。

チリ代表は同じスペイン系でありながらちょっとクール。ある時タバコを吸っている選手をペルー代表と僕が見つけた。見つけられた選手は監督には言わないでくれーと僕らに言うてくる。まるで高校生のような。



インド洋にあるマダガスカル島の隣にある国モーリシャス。この国からも2人の代表が来ていた。30過ぎのラージとレム、一緒に練習しているとなんだかボールが新しい。話を聞いていくと今回協会から寄付されたものだという。



「練習試合をしないか？」と日本代表に話し掛けてきた。突然の海外初試合、これは絶対負けられない。この試合以来僕らはお互いの家族や文化を話し合った。

あまりスポールブルが盛んではないUSA。「これは俺のバカンスだ！」と大きな声が唾と一緒に僕の顔に浴びかかってくる。日本のスシは最高だととてもスポーツマンと思えない体系で料理の話をしてくる。でも試合になると彼は本気だった。一国の代表なのだから。



オーストラリア代表はかなりクールで陽気だった。俺は東京に三日だけ行ったことがあるそして秋田にも行った。2001年に日本で行われたワールドゲームスに出場した選手だ。幼いころからスポールブルをやっていて今回の大会もベスト8になった。印象的だったのが最後の閉会パーティー、ショーの途中でセクシーな女性が登場すると、まるで子供みたいに代表全員立ち出し拍手や雄たけびをあげ子供のように騒ぎまくる。



イタリアー代表はカッコいいし実力もある。日本代表を破った後順当に勝ち進み見事準優勝を勝ち取った。夜の街でも大活躍。ペール代表やモリーシャス代表と車で街に遊びに行くとイタリアー代表がフランスの女性をナンパしている。

「イタリアー」と大きな声で僕らが叫ぶと、まるで子供のように恥ずかしがっていた。



< 開会式 >

到着から5日後とうとう開会式が始まった。

各国が次々と行進していく。

行進の時各国の代表一人が国旗を持つ事になった。

「どっちが持つんだ。」望月さんが僕ともう一人の代表に声をかけた。

若い僕らは「どっちでもいいですよ。」と軽く発言した。

僕には日本の旗を持つという責任を知るにはこのときにはまだ若すぎたのかもしれない。

ものの貴重さはその人の経験により見方が変わり重みもちがう。

僕は日本代表としての誇りと責任の重さをもっと学ばなければいけない。



音楽にあわせ行進し国名がアナウンスされる。

開会式が終わると子供達がサインを求めてきた。漢字でサインしてあげた。記念撮影を求められたり、握手をしたりした。選手同士のコミュニケーションも始まった。

しかし、試合が近づくにつれ緊張が増してきた。今までの練習成果の総決算だ。

僕は気分転換に1時間走って海を見に行っただ。

やっぱり海は大きかった。

とうとうここまで来たのか、自然と今までの23年間の人生が思い浮かんできた。



小学生の時すもう大会に優勝し曜君と親友となった。

曜君を尊敬し努力する楽しみを覚えた。

その結果走る事が得意となった。

毎日努力をしていた友達の兄貴がテレビにでていた事に憧れ僕も甲子園を目指したいと想った。

曜君と甲子園で対戦する事が実現できれば僕は感動を受ける事ができる。夢ができた。

野球という居場所があった。

中学生のとき不可能を可能にし甲子園に行った高校に感動し入学を決断した。

曜君が野球を辞めて僕は夢を失った。

僕も野球を辞めて完全に夢と居場所を失った。

夢と居場所を探す新たな旅が始まった。

二十一歳の時海に感動を与えられた。

この日以来、人々に感動を与える人間になる事を決意した。

そしてこれが僕の夢になった。

そしてスポールプールという居場所に会った。

そして日本代表となり日本人として日本を考えるようになった。

親への感謝。友人への感謝。スポールプールへの感謝。

すべてが僕の人生だ。

感動を与える人になると決断した自分が、世界選手権にきてまた感動を受けている。

世界選手権は僕の想像を超えていたのだ。感動は想像を超えた瞬間に生まれる。

さぁ戦おう。僕は試合会場に向かった。

< 試合 >

スポールブルにはトラディショナルとティールという大きく分けて2種類の競技がある。スポールブルの中でもトラディショナルゲームは文字通り「伝統的」種目である。2チームがビュット（目標球）に対してそれぞれの持ちボールを近づけることを競います。邪魔なボールは弾く（ティールする）ことができます。

ただし、ティールをする場合には、ほぼノーバウンド（ターゲットから50センチ以内）で当てなければならない。

一人の持ちボールは、シングルスでは、4球、ダブルスは3球（チームで計6球）となっている。チーム内では、寄せ役（ポワントゥール）とティール役（ティールル）の役割を決めるのが一般的で、2チームがお互いに全ての持ちボールを投球した時点で1メーヌ（セット）が終わりますが、その際、相手よりビュットに近いボールのあるチームがそのメーヌで得点を得ます。相手の最もビュットに近いボールよりも、さらに近い自チームのボールの個数が得点となり、相手に得点はありません。

メーヌを繰り返し、13点を先にとったほうが勝者となります。

今回僕が出場したのがティール競技の中でもメインのプロGRESSという競技だ。

2コートを使用して1対1で競技を行う競技で、コートにはプロGRESS用マット（1コートに2枚）を敷き、ボールスタンド（1コートに2台）を置きます。決められた時間内にできるだけ多くのターゲットをティールすることを競います。

前から順番に連続的に、一番遠いターゲットまでティールが成功すると、今度は後ろから順番にというように、ティールを繰り返していきます。

ティールは助走して行い5分間走り続けながらティールを繰り返すための持久力と巧緻性が必要な競技である。

たった5分後には結果がでている。しかも一発勝負の緊張感が走る。

世界チャンピオンになると49球投げて48球は当てるという凄さだ。

僕の日本での最高記録は23球である。

初めての世界選手権、この5分間は今までの僕の人生でもっとも濃かった5分間だっただろう。遠い異国からの参戦に観客はおおいに盛り上がった。そして、1球、1球当たるたびに観客席から歓声が上がった。途中体が痺れターゲットに当たらなくなった。

ここで終わりたいくない最後の1分で僕はあきらめずに力を振り絞った。

自然とボールがターゲットに吸い込まれていった。

そして終了のホイッスルが会場内に響きわたった。結果は43球投げて16ポイントで、世界14位という結果だった。

自然と悔しさはなかった。それどころかこんな自分でもやればできるという満足感に溢れていた。今後のプレイヤーとしての成長の楽しみを予感したのだ。

< 日本へ >

世界選手権を通して、僕という種はほんのすこし芽がでてきたような気がする。
あとは芽を育てて感動という実をみんなに与えられるようにひたすら努力するだけだ。
それが僕の夢だからだ。

とにかく僕は23年かけてやっとスポールブールという最高の居場所を見つけたのだ。
日本に帰ってきて日常の日々に戻っていった。

でも僕には一つの変化が生まれた。

それは空を見上げる時にやってくる。

僕が空を見上げると世界中の選手が練習しているのが想像できる。

世界のどっかで誰かが頑張っている。自分も負けてらんないな。

空と空は世界中のどこでも繋がっている。だからすぐに想像できる。

1ヵ月後ペルーから一通のEメールが届いた。

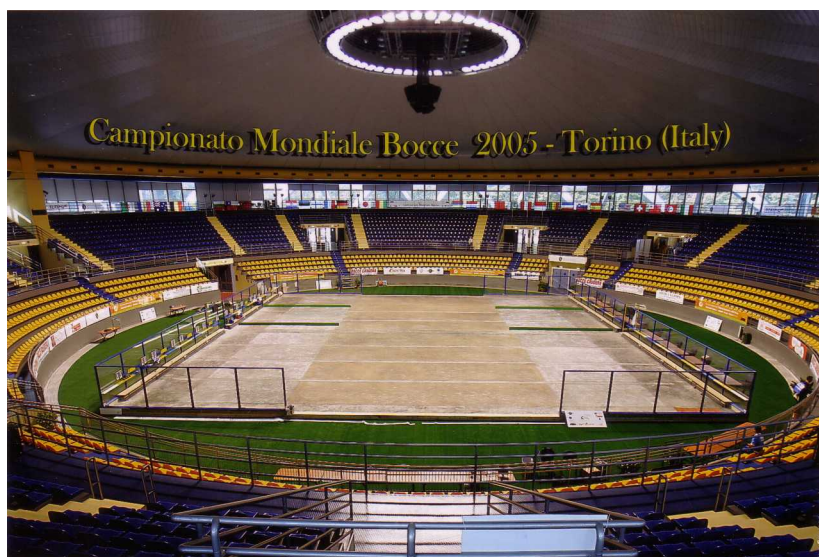
Hello Sotoyoda, friend who you are made extra?ar, always I remember to me
when repetias Amnigo. Amnigo as it is vacant to you you say
your, estan playing in Japon? or you continue thinking about the Malecon de
Nize, a strong hug and cuidate friend for the World-wide one of
Torino Italy 2005. Conversation soon in ingles or espanol your friend of
Peru Luis Petrovich Tafur

僕達には世界中のプレイヤーには共感できる合言葉がある。

次回の世界選手権2005年イタリアのトリノで行われる。そう

僕には世界中からこの声が聞こえる。

「トリノで会おう！！」





2005年9月 スポールブル世界選手権はイタリアのトリノで行われた。
前回のフランスニース大会から2年が経って、
僕は日本のエースとして成長していた。
全六種目中、四種目に出場した。
前回出場したプロフレッシュでは42球投げて19ポイントで世界9位。
他種目でも世界9位を獲得、初出場のコンビネでも予選通過と確実に力をつけている。

現在は2007年9月に行われるボスニアヘルツゴニアでの世界選手権、
2008年に行われる予定のアジア選手権、
2009年の台湾で行われるワールドゲームスに向けて日々練習に励んでいる。

感動をあなたに届けるために。